

『人民日報』に見る『武訓伝』批判

吉田富夫

1

いわゆる“行乞興学”で知られる清末の民間教育家武訓を頌えた映画『武訓伝』に対する批判は、中華人民共和国建国後に毛沢東によって発動された最初の思想批判運動として広く知られているが、その評価は、毛沢東在世期とその後の改革・開放期とで、全面的肯定・賛美から基本的否定へと、ほとんど逆転したかにみえる。ただ、後者について言えば、必ずしも評価が確定しているわけではなく、たとえば胡喬木のつぎの発言にみられるように、かなり揺れている。

「一九五一年曾经发生过对一个开始并不涉及而后来涉及陶先生的、关于电影『武训传』的批判。这个批判涉及的范围相当广泛。我们现在不在这里讨论对武训本人及武训传电影的全面评价，这需要由历史学家、教育学家和电影艺术家在不抱任何成见的自由讨论中去解决。但我可以负责地说，当时这场批判，是非常片面的，非常极端的，也可以说是非常粗暴的。因此，尽管这个批判有它特定的历史原因，但是由于批判所采取的方法，我们不但不能说它是完全正确的，甚至也不能说它是基本正确的」（『胡喬木文集』第三卷一九二頁人民出版社一九九四年）

これは中国陶行知研究会成立大会（一九八五年九月五日）で中共中央政治局委員の肩書で胡喬木が行った挨拶の一節だが、『武訓伝』批判を「非常片面的」うんぬんと強い言葉で否定しながらも、その「全面評価」については専門家の「自由討論」に下駄をあずけたあたり、いささか歯切れがわるい。そして、管見のおよぶところ、それからかなりの時間が経ったが、この運動に対する中国での評価は、いまなおその「方法」の行き過ぎを非難することのみ急で、運動そのものの歴史的意味を明らかにする方向にはほとんど進んでいないかにみえる。

しかし、結果論から歴史を切り捨ててみても、かつてあった運動が消えるわけのものではない。必要なのは、たとえ「非常粗暴」であったにもせよ、五〇年前にあったあの運動がああ時点で持っていた意味（プラスもマイナスも含めて）を少しでも明らかにすることでなければならない。以下はそのための一つの試論であるが、諸般の制約もあるので、ここでは素材を運動の主要舞

台であった『人民日報』にしぼり、最近になってあれこれと語られる当時の舞台裏のエピソードなどは、ひとまず無視する。一九五一年のあの当時、人々の目に映っていた運動そのものの一面を再現してみることで、歴史の現場における運動の意味を考えてみたいからである。

2

それにしても叙述の便宜からして、批判運動が起こるにいたる経過を、手短かに述べておかねばならない。

中国映画界の草分けの一人である孫瑜(1900~1990)が、国民党国防部所属の中国電影制片廠で映画『武訓伝』の撮影を始めたのは、一九四八年夏のことであった。シナリオも孫瑜で、主演は三〇年代からの名優趙丹。しかしロケを三分の一終えたところで、カネがつづかなくなって撮影中止。制作権と撮影済みフィルムは上海崑崙電影公司に買い取られたが、内戦でスタッフが散り散りになったため、事実上お蔵入りを余儀なくされる。建国直後の四九年十一月からシナリオに手を入れるなど撮影再開に向けて準備を始め、翌五〇年一月から撮影を再開し、十二月までかかって完成した。

すぐさま上海、北京など全国の主要都市での上映が始まったが、なかなか評判がよく、映画は賞賛の声につつまれた。のちに毛沢東は、「应当重视电影『武训传』的讨论」(『人民日報』一九五一年五月二十日付)のなかで、一月から四月にかけて『光明日報』、『工人日報』、『新民報』、『天津日報』、『進歩日報』、『大公報』、『新聞日報』、『文匯報』、『北京文芸』、『大衆電影』などに掲載された映画評四十三編を「北京、天津、上海三个城市中报纸和刊物上所登载的歌颂『武训传』、歌颂武训、或者虽然批评武训的一个方面，仍然歌颂其他方面的论文的一个不完全的目录」として一覽表にして掲げたが、かなりの過熱ぶりで、たとえば『光明日報』五一年二月二十六日付は、孫瑜「编导『武训传』记」、長之「武训传电影和武训画传」、李士釗「我看『武训传』电影」、陶宏「我看了『武训传』电影」の四編の映画評で四面の全ページを埋めている。そのうち、孫瑜のものはいわば監督としての手記であるが、そこには製作者の意図が集約されており、それはまた賞賛者たちの主要な論点でもあった。孫瑜はこの映画の「価値」を、つぎの三点にしぼっている。

「(一)『武訓伝』揭露封建主义统治者愚民政策的毒辣；武训这一介农民，认识了文化的需要、艰苦地为穷孩子争取教育的权利。(二)『武訓伝』描写

封建主義和地主惡霸反動勢力的殘暴。武訓站穩了階級的立場，向統治者作了一生一世的鬥爭。(三)他典型地表現了我們中華民族的勤勞、勇敢、智慧的崇高品質。熱愛他也可以熱愛我們的民族，提高了民族的自信和自豪」〔主要部分のみ摘出〕。

映画と並んで、李士釗編・孫之儁画の劇画『武訓画傳』も五一年一月に上海万葉書店から出版されたが、これには郭沫若が書名を揮毫し、かつ「在吮吸别人的血以养肥自己的旧社会里面，武训的出现是一个奇迹。他以贫苦出身，知道教育的重要，靠着乞讨敛舍兴学，舍己为人是难得的。但他那样也解决了不少问题，作为奇迹珍视是可以的」と「序言」に書いた。

こうして、映画『武訓伝』をきっかけに、一種のく武訓ブームとでも呼ぶべき雰囲気が出来上がっていたのが、建国後一年余り経った一九五〇十二月から翌年三月にかけての中国文化界の状況であった。

この間、民国時代に児童教育を通じて民族解放に努めたことで知られる陶行知(1891~1946)が、在世中にしきりに武訓を顕彰したことから、陶行知の名もしばしば話題にのぼった。そもそも映画『武訓伝』の制作を思いつかせたのが、一九四四年の夏に陶行知から贈られた『武訓先生画伝』であったと、孫瑜は上述の手記で述べている。この当時、陶行知は知識人の間で敬愛される存在であったから、彼の名は武訓と結びついて、敬意をもって語られたのである。

3

こうしたなかで、ひとり『人民日報』のみは沈黙をまもっていた。

無論、建国間もない中華人民共和国は朝鮮戦争というきびしい政治状況下におかれていたから、執政党の機関紙が一本の映画ごときを問題にするゆとりがなかったのだという解釈もできないわけではないが、この場合はどうもそうではない。五月に入って『武訓伝』批判のキャンペーンを始めたという周知の結果からそう言うのではなくて、たとえば三月の段階で、林淡秋「新中国人民电影事业的胜利」(三月七日付)では、前年に国营映画制作所で制作された映画二十六本がその月の八日から全国二十都市で集中上映されることを四段抜きで大々的に報じているし、これをうけたかたちで、三月十九日付には「上海观众为进步电影而欢呼」というこれまた四段抜きの記事(無署名)を載せ、上海解放後わずか一年十ヶ月でアメリカ映画が上海から一掃されたとして、春節期間中に『鋼鉄戦士』、『両家春』などの国産映画の観客数が

二十万人を越えたことをはじめ、四十を越える上海の映画館の動向をことごとまかに報じているのである。

あるいは、「読者来信」欄では、「建立电影院和剧场的良好秩序」をテーマに、観客のマナーの向上や映画館・劇場の設備の改善をめぐって、上映中の喫煙禁止といったことを含めたきわめて具体的な議論を展開してもいる(四月十五日付、四月二十九日付)。

これらはいづれも、新しい国造りを始めたばかりの当時の息吹を生き生きと今日に伝えているが、こうしたことからみて、『人民日報』があれほど評判を呼んだ映画『武訓伝』に無関心であったはずがなく、一月から四月にかけての沈黙は不自然であった。少なくとも、当時の人々の目にはそう映ったはずである。

もっとも、映画ではなくて、『武訓画伝』については、三月の段階で、「読者・编者」欄に王一波という読者の投書が載っている(三月十八日付)。その一部を示せば、

「中国人民是有着勤劳坚毅的伟大传统的，即使在历史上封建反动的统治下，仍然出现不少可歌可泣的人物，行乞兴学的武训就是其中之一。武训是应该受到表扬的。然而表扬武训并不等于把武训的事迹全部搬了出来，……(中略)。例如他经常使用的『跪请』『跪求』等方式，我们有什么必要把它保留下来么？」

これに対する編者の反応が四月二十二日付の「読者・编者」欄にあって、『武訓画伝』の編者李士釗から四月十一日付で、王一波の批判を受けた自己批判の手紙が編集部に寄せられたとして、「把许多不该写的也写出来，而且批评得不够深入，自己犯了客观主义的错误，还以为忠实于历史主义。我愿意竭诚地接受批评和指正」という手紙の一節を引用した上で、

「实际上，武训的努力是服务于反动统治阶级的，他在当时的历史上，并没有任何革命的作用。正因为这样，他的『兴学』才采取了向地主跪请跪求的方式，而且受到了反动王朝的表彰」

として、「王一波先生の批判和李士釗先生的自我批评并未触到『武訓画伝』的主要问题。希望李王先生能作进一步的检讨」と、きびしい批判を投げ返している。これがく武訓ブーム>に対する『人民日報』の最初の反応であった。状況を見極めつつ、軽くジャブをくり出した感じである。ただ、この三日後の四月二十五日発売の文連機関誌『文芸報』第四巻第一期には後述の賈霽「不足为训的武训」および江華「建议教育界讨论『武訓伝』」が掲載されていたから、注意深い人には、この時点でかなりなきな臭さは感じられたか

も知れない。ただ、思想批判運動に慣れた後の時代と違って、人々にとってこれがいわば初体験であってみれば、ことがそれほど深刻に受けとめられたようには思えない。後の人々がこの批判運動を語る際に、例外なく前述の『人民日報』『社論』から説き起こすことなども、四月段階ではまだこの深刻さがほとんど意識されていなかったことを、側面から物語るもののものである。ともかく、これからひと月足らず、『人民日報』はなおも沈黙を続けるのであるが、「読者・编者」欄のこの目立たぬ動きが、その後の批判運動のひそやかな序幕であったことは間違いない。

4

五月十六日付と十七日付の『人民日報』は、突如二日連続で映画『武訓伝』に対する批判論文を掲載する。

十六日付は三面の四分の三ちかくを使って、①楊耳「陶行知先生表扬“武訓精神”有积极作用么?」、②江華「建议教育界讨论武训传」、③鄧友梅「关于武训的一些材料」の三本を掲載し、ほかに「鲁迅先生谈武训」という見出しの囲みで、魯迅が何干のペンネームで書いた雑感「难答的问题」(『且介亭杂文・附集』所収)をやや大きめの活字で取めた。また掲載に当たっては、次のような「编者按」を付けた。

「歌颂清朝末年的封建统治拥护者武训而污蔑农民革命斗争、污蔑中国历史、污蔑中国民族的电影『武训传』」的放映，曾经引起北京、天津、上海等地报纸刊物的广泛评论。值得严重注意的是最早发表的评论(其中包括不少共产党员所写的评论)全部是赞扬这部影片或者是赞扬武训本人的」

翌十七日付では、④賈霽「不足为训的武训」という長い論文が三面のほとんどを占めた。

こうして映画『武訓伝』および<武訓ブーム>に対する全面的な批判運動の幕が上がるのだが、ここでちょっと寄り道をするとなれば、これらの文章は上記「编者按」も断っているように、魯迅のそれも含めてすべて『文芸報』に発表されたものの採録であった。ただ、もともとの発表の順序は、④と②が四月二十五日発行の第四卷第一期に、①と③が五月十日発行の同第二期に発表されたもので、①は④への批判として書かれたものであった。従って、この順序から言えば④をまず紹介し、次いでそれへの批判として書かれた①を掲載するというのがスムーズなはずなのに、『人民日報』の编者はそれを転倒させた。その理由を「编者按」は①について、「这篇文章虽然只

接触了这个问题的一个側面，见解却比较深刻」と記すのみだが、両者を読み比べてみれば、編者の秤がどこで振れたかは明らかである。

問題は陶行知にあった。前述したように、民国時代に陶行知はしきりに武訓を顕彰したが、これについて賈霽が「国民党万恶统治下的白色恐怖的环境与条件」の下で陶行知が「武训精神」を「表扬」したのは「陶行知先生当时是对的，他的苦心是完全可以理解的」と一定の理解ないし評価を示すのに対して、楊耳は、

「在某种意义上说，在反动统治下宣扬『武训精神』，比起今天人民取得了政权之后宣扬『武训精神』，它的为害决不可能更小些。相反，倒不如说是可能更大些。因为，在反动统治下面宣扬『武训精神』，就会更直接地『降低和腐食群众的文化和政治上的战斗力』」

と、まったくこれを認めようとしな。現実の複雑さを視野に入れようとしない口舌の徒の空論に似ているが、『人民日報』の編者は、この楊耳の「不管是今天或是昨天，『武训精神』都是不值得表扬的，也不应当表扬的」という論点に肩入れし、賈霽はそれとの対比で、いわば手頃な批判の対象として付き合わされた格好でもあった。

そして、この文脈の上で、「应当重视电影『武训传』的讨论」と題する五月二十日付の「社论」が『人民日報』の第一面に発表される。今日では毛沢東の執筆であることが広く知られているこの「社论」をきっかけに、批判運動が本格的に始まったことは、従来から争って指摘されていて、また事実そのとおりののだが、これまで述べた流れの中に置いてみれば、たとえば批判の理論的枠組み=方向性を示した冒頭にちかい有名な一段、

「像武训那样的人，处在满清末年中国人民反对外国侵略者和反对国内反动封建统治者的伟大斗争的时代，根本不去触动封建经济基础及其上层建筑的一根毫毛，反而狂热地宣传封建文化，并为了取得自己所没有的宣传封建文化的地位，就对反动的封建统治者竭尽奴颜婢膝的能事，这种丑恶的行为，难道是我们所应当歌颂的么？」

なども、その趣旨は前述の「読者・编者」の言葉に通じるし、「污蔑农民革命斗争，污蔑中国历史，污蔑中国民族」という前記「编者按」に使われた表現も、ここにそのままの形で現れる。こうした点を考えると、「社论」に毛沢東の手が入っていることは確かだとしても、批判の基本的骨格は、これ以前に党中央のどこかの段階で方向付けられたと思える。むしろ常識的に考えても、毛の介入はかなり早い段階からあったと考えるべきで、上記の事実はそのかすかな痕跡と言えるかも知れない。ただ「社论」の末尾の一段、

「特別值得注意的，是一些号称学得了马可思主义的共产党员。他们学得了社会发展史——历史唯物论，但是一遇到具体的历史事件，具体的历史人物（如像武训），具体的反历史的思想（如像电影『武训传』及其他关于武训的著作），就丧失了批判的能力，有些人则竟至向这种反动思想投降。（中略）一些共产党员自称已经学得的马可思主义，究竟跑到什么地方去了呢？」

のあたりは、癖のある独特の皮肉っぽい口調からみて、間違いなく毛その人のものに違いない。

「社論」の発表と同時に、おなじ日の『人民日報』は第三面の「党的生活」欄で、これを「资产阶级的反动思想」に対する「一场原则性的思想斗争」であるとして、「共产党员应当参加关于『武训传』的批判」と呼びかけた。この指示は、「凡是放映过『武训传』的各城市，那里的党组织都要有计划地领导对『武训传』的讨论，要把领导这一讨论当作一个严重的思想工作」「将使每个党员懂得了革命者与封建统治拥护者的原则区别，人民民主主义与改良主义的区别，民族传统中落后的、消极的、反动的东西和进步的、积极的、革命的东西的区别」などと、かなり細かく闘争の具体的方向をも示している。

こうして批判の理論的枠組みと方向性を示した『人民日報』五月二十日付は、「党的生活」に並べて鄧友梅「武训在历史上是个什么角色？」を掲げて、批判の重点が武訓にあることをも示唆した。

さらに第五面には金紫光「从新认识武训」、および端木蕻良「武训是封建统治者所肯定的示范人物——致本刊编者信」という二人の「自我批评」の文章を掲載した。前者は『新民報』に発表した文章で「小资产阶级温情主义的观点」で武訓に同情を示したことを、また後者は「封建统治者所肯定的示范人物」である武訓に対して「肯定的赞扬的态度」を取ったことを、それぞれ常識的な範囲で素直に反省していると読めるが、『人民日報』はこれらに対して「还极不够深刻」との「编者按」をつけた。つまり、この程度の「自我批评」ではダメだとの見本を示したわけである。その上で、「编者按」は「必须进行一个全面的、有系统的、深入的批判，以肃清武训宣传者在人民中间所传播的毒害的影响」と声を励ますのである。まことに至れり尽くせりというべきか。

かくして『人民日報』における『武訓伝』批判の第一幕は、周到に用意された。後は敷かれたレールの上を走るにみである。

批判運動の第二幕は、おおよそ一ヶ月つづいた。「社論」発表の翌日から、各地の取り組みの報道が『人民日報』にも相次いだ。その具体的な進行については、たとえば中共上海市文化局総支部が五月二十六日に策定したという討論計画(六月十日付「党的生活」欄)などが一例として参考になる。

それによれば、「学习时间」としては五月二十八日から六月中旬までの三週を予定する。第一週は、文献学習と指導者の講演などをもとに学習し、小グループごとに批判と自己批判を行う。第二週は、総支部で系統的な批判を展開し、かつ武訓および『武訓伝』についての自己批判を書く。文書の書けない者は、小グループでの発言を記録してもらう。第三週は、上記の文書を支部ごとに点検・評価し、総会で評価をつけて公表する。批判と自己批判がとくに「深刻」と認められるものは、上級に上げ、党機関紙などで発表する。

『人民日報』で見ると、その後の経過は、上海にかぎらず、ほぼこのようなテンポで進んだかと思えるが、「読者来信」欄に現れた下部での反応には、ある種のパターンが見て取れる。一例を挙げよう。

「十年前我从小学课本上读到了武训的故事以后，就对这个『非常』的人物发生了爱好和崇拜的心理。我深深地为他的数十年如一日的『苦行』所感动。(中略)不久以前，我从电影『武训传』上看到他乞钱挨打、对『义学』老师和学生下跪的时候感动得流了泪。(中略)但我读了『不足为训的武训』和『陶行知先生表扬“武训精神”有积极作用么?』两篇文章以后，我对武训的错误看法有些动摇了。接着我和一些同学们交换意见，又经过了两天的冷静思考，我对武训的认识完全变了，说他没有阶级立场是正确的」(杨冰五月二十五日付「読者来信」欄)

以下は、武訓の「苦行」は階級矛盾を糊塗するもので、武訓は封建支配階級の手先と見るべきだという、「社論」の線にたどりつくのだが、そのことよりも、かつては武訓や『武訓伝』に涙していたのが批判運動で目覚めたとする、読者の投書(つまりとくに「深刻」と認められた下部の自己批判書)の多くに共通するパターンが興味深い。

おなじ傾向は、孟冰「我们讨论了电影『武训传』」(六月十六日付『文芸報』第四卷第四号原載)にも見られる。これは中央文学研究所での討論の報告であるが、映画『武訓伝』を見た当初の反応は以下の四種類であったという。

- ①「认为这部片子很好。有几个同志曾感动得流下泪来」
- ②「认为武训还是我们民族历史上一个好人物。他的『苦行』、『利他』和『顽强』精神正是我们的标榜」
- ③「认为武训的方向、道路是错误的，可是他的『苦行』、『利他』、『坚韧的事业精神』，『为穷孩子』服务的主观愿望还是好的」
- ④「认为武训的全部历史、事业、精神道德都是错误的」

このうち、①と④が少数であった、と孟冰は言う。これは文学研究所という知的エリート集団での反応だが、もっと普通の庶民レベルでは、上記の楊冰がそうであるように、①の比率が②と並んで高く、④はごく少数であったに違いない。だからこそあれほどの評判を得たわけだが、毛沢東(および中共中央)がやろうとしたことは、この比率を逆転し、①から③を批判によって完膚無きまでに叩き潰して、④一本に認識を統一することだったと言えば、ことはわかりやすい。

そのため、『人民日報』紙上でも盛んな応酬が交わされたが、ここでは紙幅の制限もあるので、それらを以下の二点にしぼって、アウトラインを示すにとどめる。

①武訓批判

映画『武訓伝』批判は、つまるところ歴史上の実在の人物である武訓その人をどう評価するにかかっているのだから、この点をめぐって汪曾祺「武訓的錯誤」(五月二十二日付)、謝興堯「武訓其人其事」(五月三十日付)、胡繩「为什么歌颂武训是资产阶级反动思想的表现?」(六月七日付)、鮑昌「武训到底是为谁服务的?」などの長大な論文が次々と書かれたが、その主旨は前述の「社論」につきている。ただ、それらの多くが、「我们得到否定和蔑视武训的结论，究竟是不是因为我们采取了一种拿『现在的尺度』衡量古人的粗鲁办法呢?」(胡繩)という問題をめぐって多くの紙幅を費やしているのは、今日の目で見れば、それらの批判者自身が、おのれの立脚点の弱さに気がついていたことの証左でもあったろう。「现在的尺度」であり得るはずのない<革命>の要求を古人に突きつける毛沢東時代の歴史認識の「粗暴」さは、まさにこれらの論文に始まるのである。

なお小さな問題であるが、ここに登場する汪曾祺は、あの“京派”の作家であろうか。「社論」発表の翌々日に出されたこの長い論文は、「革命，是统治者最讨厌的东西。因为讨厌革命，反动的统治者就是欢迎武训」うんぬんと、なかなか勇ましいのだが、まさかこれがあの汪曾祺の手になるとは信じられない。

②<自己批判>とそれへの反応

「社論」の発表によって最大の圧力を受けたのが監督の孫瑜であったことは想像に難くないが、彼は五月二十六日付で「我对『武训传』所犯错误的初步认识」なる千字足らずの短い自己批判を発表したが、それは「无论编导者的主观愿望如何，客观的实践却证明了『武训传』对观众起了模糊革命思想的反作用」とか、「我描写武训行乞兴学的失败和他发现了他自己失败后的痛苦，以为那就算是批评了他；可是基本上我是在同情他和歌颂他。这一个错误是极其严重的」とか、内心批判に納得していないことの明らかなものであった。これに対しては、丁曼公「武训的真面目——评『武训传』影片、武训及孙瑜先生的检讨」（五月二十九日付）が「作者的主观愿望不能离开他的创作的客观实践来说明」という公式論からこれを叩いた。

孫瑜よりも粘り腰をみせたのは『武訓画伝』の編者李士釗で、「我初步认识了崇拜与宣扬武训的错误」（五月三十一日付）は、自己批判の形は取っているものの、「退一万步说：『武训在旧社会还是个好人的吧』」「在中国的封建社会里，穷人不能念书，他以一个穷苦农民的身份，自发地起来为人民创造受教育的机会，（中略）总该有他的『人民性』吧？」といった言葉を批判の対象という体をつくろいながらあちこちに散りばめ、かつ陶行知についても「我回忆陶行知先生一九四三年中国人民抗日战争最艰苦的阶段，他为了鼓励大家坚决地在反动统治下，为坚持民主教育运动的斗争，而提出『新武训运动』口号的苦心，是可以理解的！」と述べるなど、「现在的尺度」で古人を切り捨てることに執拗な抵抗をみせた。強いられた奴隷の言葉を使いつつ、おのれの信念を語ったという点で、今日読んでも齒ごたえのある一文だが、これに対しては張再学「好名词掩盖下的坏思想——评『武训画传』及李士釗先生的检讨」（六月一日付）、朱丹「评『武训画传』及李士釗先生的检讨」（六月三日付）、王朝聞「评『武训画传』的创作作风」（同上）、華君武「不应歪曲劳动人民的形象！」（同上）などの反批判が相次いだが、論点はこれまで紹介したのと大同小異なので、略す。

こうした中であって、編者から「态度是诚恳的」「我们欢迎这种自我批评」と独り合格点をもらったのは李長之「我在关于『武训传』的讨论中获得了教育」（五月二十七日付）であった。その特徴を一口で言えば、毛沢東『文艺講話』の線にそってことこまかに自己点検を進めていることで、「社会实践是检验主观愿望的标准，效果是检验动悸的标准」、「以政治标准放在第一位，以艺术标准放在第二位」などの毛の言葉も引用されている。こうした風習はこの当時はまだ一般的ではなかったが、いかにも優等生の作文めいたこ

うした自己批判が『人民日報』編者から「歓迎」されたことは、本音よりも建て前の重視される時代になったことを物語るものようでもある。上述の李士釗のケースと並べてみると、ひときわその感が深い。

著名人でその動向が注目された郭沫若は、六月七日付に「联系着武训批判的自我检讨」を發表し、一九四三年に陶行知の主催する武訓記念会で武訓を賞賛したこと、前述のように『武訓画伝』に題字と序文を書いたことの非を率直に認め、「我诚恳地向读过『武训画传』地朋友们告罪」と述べたが、新国家のリーダーの一人である彼の場合、むろん反批判の声は起こらなかった。

6

やがて『人民日報』は、七月二十三日から二十八日にかけて武訓歴史調査団による「武训历史调查记」(以下「调查记」と略称)を連載するが、これによって批判運動は一挙に終幕を迎える。むろん、これ以後も『人民日報』紙上で『武訓伝』をめぐる発言は年末まで断続的につづくが、それらはもはや批判運動というよりも学習運動と言うにちかい。それほど「调查记」のインパクトは強力であった。

「调查记」冒頭の説明によれば、調査団は人民日報社の袁水拍、中央文化部の鍾惦棐および李進(これが毛沢東夫人の江青のペンネームであったことは、いまでは広く知られている)をリーダーとする十三人で、二十数日かけて武訓の故郷の山東省堂邑県を中心に百六十数人から聞き取り調査を行い、関係地方誌も蒐集したという。「调查记」は以下の五章からなる。

- (一) 和武训同时的当地农民革命领袖宋景诗
- (二) 武训的为人
- (三) 武训学校的性质
- (四) 武训的高利贷剥削
- (五) 武训的土地剥削

それぞれの章が紙面の一面をほとんど独占するほどの長文であるが、読者をあっと言わせたのは、なによりも、武訓の故郷に、武訓と同時期に、捻軍と繋がりを持った農民革命軍・黒旗軍とそのリーダー宋景詩が存在したことを明らかにしたことであった(一)。この発見によって、「武训受了『具体的历史条件的限制』，是不可能革命的思想和行动的」とする根強い<歴史的限界>論は破産した、と「调查记」は言う。その上で、聞き取り調査や文献

資料をもとに、「武訓是一个以『兴义学』为手段，被当时反动政府赋予特权而为整个地主阶级和反动政府服务的大流氓、大债主和大地主」だときめつけ(二、四、五)、その「義学」も「以『为贫寒』的口号欺骗农民，而实际上为地主和商人办成了三所学校」というのが実体であったと述べた。武訓による土地購入台帳の写真まで掲載された。

この「調査記」の発表によって、ことはもはや武訓をどう評価するかといった討論のレベルを離れて、「好好学习『武訓历史调查记』」(八月三日付「读者来信」欄)という方向へと流れていく。やがて、八月八日付には、文連副主席で中共中央宣伝部の周揚が長大な論文「反人民・反历史的思想和反现实主义的艺术——电影『武训传』批判」を発表して、

「武训并不是历史上什么重要人物，他不过是反动的封建统治者的各色各样的奴才之一，但他却是其中的一个比较特殊的、带有特别的虚伪性和欺骗性的奴才。电影『武训传』就以历史的伪造和艺术的渲染把他描画成一个革命人物和民族英雄。于是一具封建僵尸穿上了革命的衣服大摇大摆地走进人民的行列，在人民当中散布毒素」

と書いたが、これが結論であった。そして、この年も末の十一月二十四日に八百人を集めて開かれた北京文芸界の“学習動員大会”で、おなじ周揚が、

「由于领导上的放松或放弃毛泽东同志的文艺路线，文艺思想战线上产生了思想界限不清的混乱现象」

と述べたのは、半年を超える『武訓伝』批判運動の行き着いた先であった。

7

以上の流れを俯瞰すれば、ある時点まで攻撃対象を自由に活動させておいて状況をつかみ[五〇年十二月から五十一年四月]、機が熟したと見るや正面から一気に攻撃をかけ[五月から六月]、最終的に相手の息の根を止める[七月以降]という展開が見て取れる。これは明らかに戦場における作戦の応用であるが、この際にとくに際だった特徴は、いちばん大事な第二段階で大衆動員の方法を取ることである。『人民日報』の「读者来信」欄がその一つの現れである。そしてこのパターンが、この後くり返される思想批判運動の原型となった。しかも、時代が下がるにつれて、第二段階の大衆動員に拍車がかかり、ついに文化大革命にいたるわけだが、その原点はここにあった。これが、『武訓伝』批判の一つの意味である。

だがこの運動にはむろん、それ独自の意味もあった。当時の『人民日報』

を繰ってみれば、建国わずか一年余りのこの国が、内外二つの難題に取り組んでいたことがわかる。朝鮮戦争と土地革命である。ほとんど交互に、この二つの問題にかんする記事が載るところから、当時の緊張した空気が伝わってくる。おりしも七月には中共成立三十周年を迎えていたが、それに合わせて、『人民日報』は七月から、「中国社会各階級的分析」を初めとする毛沢東の初期著作の掲載を始め、やがて十一月十二日には『毛沢東選集』第一巻が発売される。こうした動きは「中国共産党的創造者和領袖毛澤東同志」（七月一日付の八面組み写真の見出し）の権威確立ということもさることながら、「进一步巩固与发展人民民主专制」（五月二十九日付「社論」）という要求がより根本にあったと言うべきである。むしろ、この両者は相補うものとして意識されていたはずである。そして、こうした文脈に置いてみれば、『武訓伝』批判が、朝鮮戦争と土地革命という二つの“戦場”のかたわらに設定されたもう一つの“戦場”であったことがはっきりする。これによって思想的武装を整え、翌年の〈三反・五反〉運動へと突入する。別の言い方をすれば、これは思想分野における〈三反・五反〉運動であった。ここから新しい思想的営為が始まると、運動の担い手たちは信じたはずである。

しかし、この運動によって、〈旧時代〉は死を宣告された。民国時代を生き抜いてきた知識人のほとんどは、この運動に出逢って、初めて「人民民主专制」とは何かを思い知らされたはずである。もはや昨日のままではやっていけない。そこは〈階級闘争〉至上論の支配する世界で、個人の自由な発想は許されないのだと。長い戦乱や国民党時代末期の腐敗への嫌悪から、新世界の建設に多くの知識人が期待を寄せていただけに、その戸惑いは大きかったはずである。ここで紹介した孫瑜の短い自己批判や、四苦八苦して民国時代のおのれや陶行知を弁護しようとした李士釗などの文章は、その戸惑いを如実に物語っている。

しかし、そうした戸惑いに対する答えは、くり返される公式論であった。ここでは十分に引用することはできなかったが、批判者たちの論点は、結局のところは「社論」の観点の敷衍であり、反復であった。その意味で、これはまたその後四半世紀もつづくスコラ哲学時代の始まりでもあった。ここに紹介したように、公式論は見事に勝利を取めたかに見える。批判された側は、やがて大同小異の“自己批判”をくり返すようになった。だが、はたしてそれは勝利であったろうか。